
循環基本計画分析・新指標検討に関するワーキンググループ（指標WG）開催報告

検討テーマ

1. 次期循環型社会形成推進基本計画の指標体系の検討
2. 次期循環型社会形成推進基本計画の指標および指標の算定・評価方法の検討
3. 現行の循環型社会形成推進基本計画における物質フロー指標の確認

指標WG委員（敬称略・50音順）

■ 座長：

森口 祐一 国立環境研究所 理事

■ 委員：

(*) 粟生木 千佳 地球環境戦略研究機関 主任研究員

(*) 大迫 政浩 国立環境研究所 資源循環領域 領域長

近藤 康之 早稲田大学 政治経済学術院 教授

田崎 智宏 国立環境研究所 資源循環領域 資源循環社会システム研究室 室長

田原 聖隆 産業技術総合研究所 安全科学研究部門 IDEAラボ ラボ長

(*) 橋本 征二 立命館大学 理工学部 環境都市工学科 教授

(*) 村上 進亮 東京大学大学院 工学系研究科 教授

(*) は中央環境審議会循環型社会部会委員を示す

■ アドバイザー

検討に際して専門的・技術的な知見等を得る観点から、議題に応じたアドバイザーを招聘。これまででの招聘者は以下の通り。

・梅田 靖 東京大学 工学系研究科 人工物工学研究センター 教授

・山本 雅資 東海大学 政治経済学部 経済学科 教授

指標WG 開催状況および今後の予定



開催状況および今後の予定

	開催日／予定日	議題（予定）
第1回	8月1日	<ul style="list-style-type: none">① 次期計画の指標体系および設定する指標について② 資源循環×脱炭素に関する指標の設定について③ 循環利用率の見直しについて
第2回	9月20日	<ul style="list-style-type: none">① 全体像に関する指標および重点分野ごとの指標の設定について② 資源循環×脱炭素に関する指標の設定について③ 目標設定のための物質フローモデルを用いた将来推計について
第3回	11月頃	<ul style="list-style-type: none">① 全体像に関する指標の設定について② 重点分野ごとの指標の設定について③ 目標設定のための物質フローモデルを用いた将来推計について
第4回	1月頃	<ul style="list-style-type: none">① 2023年度の物質フローおよび物質フロー指標の動向について（白書掲載内容について）② 次期循環型社会形成推進基本計画の指標について③ 目標設定のための物質フローモデルを用いた将来推計について

■ 指針案*と指標設定の関係性について

- 指針案に記載されている事項の中には、定量的な指標（数値指標）によって点検を行うにはなじまないものもある。数値指標の設定が難しいものについては無理に指標を設定せず、定性的にフォローアップをしていくべき。

■ 指標設定において気を付けるべきこと

- 各種取組を実施している各主体者に共感いただけるような指標の設定が重要。
- 地域が使用する指標については、各地域が使いやすいだけでなく、各地域におけるデータ収集とも連動したものを想定。
- 企業が使用する指標については、国の指標と同じ位置付けにはそぐわないと考えられることから、計画の目標達成に向けて期待される企業の取組を測るための指標の例示として設定していくことを想定。
- 指標の設定において、国際比較可能性は重要であるが、各国の産業構造の違い等も考慮し、本来の目的も考えた上で推計を行い、適宜参考データとして用いる。また、欧州等の動向も踏まえた指標（および参考データ）の検討も併せて実施していくことが重要。

■ 指標設定と関連した課題

- 指標の設定においては、本来測りたいが情報が得られないものや精度に課題があるものもあることから、データ整備も併せて検討を行うことが重要。

*指針案：「新たな循環型社会形成推進基本計画の策定のための具体的な指針（案）」

現在検討中の指標体系（案）

現行計画

全体像に関する指標
(代表 4 指標 + 補助 10 指標 = 14 指標)

- 代表指標 — 物質フロー指標
- 補助指標 — 物質フロー指標

物質フロー指標：循環型社会づくりの進展度合いを把握するため、どれだけの資源を採取、消費、廃棄しているかというものの流れ（物質フロー）の3つの断面である「入口」、「循環」、「出口」を代表する指標として定めた指標（例）循環利用率

循環型社会形成に向けた取組の進展に関する指標
(重点項目別)

- 代表指標
 - 項目別物質フロー指標
 - 項目別取組指標
- 補助指標
 - 項目別物質フロー指標
 - 項目別取組指標

重複を含めると約140指標あり、指標から全体的な状況を把握することが難しいことや、行政事業レビュー等との重複が指摘されてきた

次期計画（案）

下線太字：変更点

全体像に関する指標
(10指標程度)

物質フロー指標 + 取組指標

取組指標：物質フロー指標だけでは表すことができない、国、事業者そして国民という、各主体による循環型社会づくりのための取組の進展度合いを計測・評価するための指標

循環型社会形成に向けた取組の進展に関する指標
(重点分野別)

最終アウトカム指標（インパクト指標）

*重点分野と関係する個別の施策の進捗状況等ではなく、重点分野で示されている方向性に向けた達成状況を示す指標。アウトカム指標の設定を目指す。定量的な指標の設定が適さないものへの対応は検討中。
* 地域・企業レベルで参考となる指標も設定。

重点分野ごとに2～3指標程度を設定し、わかりやすくする。補助指標は設けない代わりに、進捗点検の際には、増減要因をみるために、行政事業レビュー結果等も用いて、施策の取組状況・効果も併せてみる。また、進捗点検をする際に指標とあわせて見ておくべきデータは必要に応じて設定。

現在検討中の全体像に関する指標（案）



緑太字：現行計画の全体像に関する指標

No	指標	選定理由
1	資源生産性	循環型社会形成を表すマクロな指標。 過去から継続してきたことから、諸外国での認知度も高い指標であり、対海外の観点からも重要。
2	一人あたり天然資源消費量 (マテリアルフットプリント)	循環型社会形成を表すマクロな指標。 SDGs指標であり国際比較の観点からも重要。
3	入口側の循環利用率	循環型社会形成を表すマクロな指標。 過去から継続してきたことから、諸外国での認知度も高い指標であり、対海外の観点からも重要。
4	出口側の循環利用率	
5	最終処分量	
6	循環ビジネスの市場規模	サーキュラーエコノミーの進展を示すもの。 成長戦略フォローアップ工程表において「循環経済への移行とビジネス主導の国際展開・国際協力、その他」におけるKPI（2030年までに、サーキュラーエコノミー関連ビジネスの市場規模を、現在の約50兆円から80兆円以上にすることを目指す）としても設定されており重要。
7	国民の意識・行動	循環型社会の形成を進めるためには人々の意識・行動変容が求められており、その基盤・社会の状況を測ることが重要。
8	①資源循環による削減貢献が期待できる部門由来の温室効果ガス排出量 ②廃棄物部門由来の温室効果ガス排出量	資源循環の取組等によるカーボンニュートラル達成に向けた総体的な状況を測る指標。現行計画の指標である「廃棄物部門由来の温室効果ガス排出量」および「廃棄物の原燃料・廃棄物発電等への活用による他部門での温室効果ガスの排出削減指標」から、より広く循環型社会形成による脱炭素化への貢献を測ることが重要。
9	カーボンフットプリントを除いたエコロジカルフットプリント	資源循環の取組による生物多様性への影響を直接的に評価することは難しいことから、生態系サービスの需要量（負荷量）をその代替として測ることで、資源循環の取組を含む社会経済活動の変化による生物多様性への負荷をみることを目的とした指標。 生物多様性国家戦略では資源利用等による生物多様性への負荷をみるために採用している指標（名称：「国内の事業活動を通じた日本全体のエコロジカルフットプリント」）